

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月20日現在

機関番号：17701
 研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2010～2012
 課題番号：22520320
 研究課題名（和文） 第一次世界大戦後のドイツにおける民族主義的読書共同体「ドイツ家庭文庫」とナチズム
 研究課題名（英文） The nationalistic reading community “The German home library” in Germany after the First World War and its connection to National Socialism
 研究代表者
 竹岡 健一 (TAKEOKA KENICHI)
 鹿児島大学・法文学部・教授
 研究者番号：30216874

研究成果の概要（和文）：本研究は、右翼商業職員労働組合「ドイツ民族商業補助者連合」によって1916年に設立された読書共同体「ドイツ家庭文庫」を取り上げ、その広報宣伝雑誌の綿密な分析を通じて、この読書共同体の出版活動および読書指導が第一次世界大戦後のドイツにおけるナショナリズムの隆昌に多大な貢献をなしたことを明らかにした。それによって、ナチズムと文学のかかわりを研究する上で重要な新しい基礎的資料と、文学的な研究対象を通じたナチズムの研究方法の一つのモデルが提示された。それと同時に、「ブッククラブ」という新しい重要な研究対象も見出された。

研究成果の概要（英文）：This research deals with the reading community “the German home library”, that was established in the year 1916 by the trade union of the right-wing commerce white-collar “the German national commerce assistant association”. Through the careful analysis of information- and advertising magazines of this reading community it became clear that its publication activities and recommendations of reading material contributed largely to the prosperity and strengthening of the nationalist movement in Germany after the First World War. This study introduces new and important fundamental material for the study of the connection between National Socialism and Literature, and shows a model of research of National Socialism by way of literary research. At the same time a new, important research topic “The Book Club” was discovered.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	200,000	60,000	260,000
2012 年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総 計	1,000,000	300,000	1,300,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：ドイツ文学、ナチズム、民族主義、ワイマール共和国、第三帝国、中間層、読書、ブッククラブ

1. 研究開始当初の背景

人文科学における分野横断的な学術研究

の一典型とも言えるナチズム研究においては、ナチズムと文学のかかわりに関する研究も重要な一角を占めている。しかし、この方面の主な先行研究においては、ナチスによる文学受容やナチスに認められた作家、あるいはナチスのメディア戦略など、もっぱらナチスによって実行された文化政策に焦点が当てられ、ナチスやナチス政権と直接関係を持たない右翼団体の活動が取り上げられることはほとんどなかった。

それに対し、本研究の研究代表者は、本研究の実施に先立ち、第一次世界大戦後のドイツにおけるナショナリズムの隆昌とナチズムの浸透を解明するための新しい有益な手がかりとして、ナチスの結党以前から存在した右翼団体によって組織された「読書共同体」という新たな研究対象を見出していた。すなわち、ドイツでの文献調査によって予め入手していた一部の資料の分析によって可能な範囲で、ドイツ最大の右翼商業職員労働組合「ドイツ民族商業補助者連合」によって1916年に組織された読書共同体「ドイツ家庭文庫」の歴史や活動全般、保守的・民族主義的作家をはじめとする同時代の作家とのかかわり、雑誌『かまどの火』を通じた広報宣伝戦略、ナチスの政権獲得に対する対応やナチス政権下でナチスの宣伝媒体として果たした役割などについて、それらの一端を解明していたのである。

しかしながら、資料が十分に揃っていないことから、研究成果は部分的なものに留まり、この読書共同体とナチズムのかかわりを高度な説得力を持って証明するには至っていなかった。そこで、「ドイツ家庭文庫」に関する資料の調査・収集をさらに押し進め、この読書共同体とナチズムのかかわりを十分な資料に基づいてより詳しく解明することが喫緊の課題となっていた。

2. 研究の目的

本研究は、第一次世界大戦後のドイツにおける民族主義の高まりと文学のかかわりを、右翼商業職員労働組合「ドイツ民族商業補助者連合」によって組織された読書共同体「ドイツ家庭文庫」の活動に基づいて解明し、ナチスによる文化政策とは異なる観点からナチズムの隆昌の原因の一端を明らかにし得る一つの研究モデルを提示することを目的とした。そして、この目的を達成する上で、申請段階では、次の6つの点を主な研究課題として掲げた。

- (1) 「ドイツ民族商業補助者連合」の歴史と活動
- (2) 同連合の「教育・出版活動」と「ドイツ家庭文庫」の位置づけ
- (3) 「ドイツ家庭文庫」の歴史と理念
- (4) 「ドイツ家庭文庫」とかかわりの深い作家・作品
- (5) 雑誌『かまどの火』を通じた読書指導と広報宣伝戦略
- (6) 「ドイツ家庭文庫」のナチス政権下での活動

しかしながら、これらのうち(1)と(3)については、採択前年度に印刷発表した2つの論文において、この時点までに入手し得た資料を分析することにより、かなりの程度明らかにすることができた。すなわち、「ドイツ民族商業補助者連合(DHV)の歴史と活動——労働組合活動と政治的動向とのかかわりを中心に」(鹿児島大学法文学部紀要『人文科学論集』第71号、155～173頁、2010年2月)において、労働組合活動を中心とする同連合の歴史とナチスの台頭とのかかわりが、また『ドイツ家庭文庫』について——ワイマール共和国時代から第三帝国時代における右翼商業職員への読書指導の一端(『かいりす』第47号、84～104頁、2009年11月)に

において、民族主義的な理念に基づく同文庫の成立・発展が、詳しく跡づけられたのである。

こうした経緯を踏まえ、採択後の本研究においては、上記の6つの点すべてを考慮しながらも、特に(2)、(4)、(5)、(6)の4点を明らかにすることに、重点的に取り組んだ。

3. 研究の方法

主に文献を研究対象とする本研究においては、一次資料・二次資料の綿密な読解と分析が作業の大部分を占め、次のような手順で進められた。

(1) 関連文献の調査・収集

(2) 資料に基づく「ドイツ民族商業補助者連合」と「ドイツ家庭文庫」の分析・考察

(3) 研究成果の総括と公表

これらのうち、本研究を遂行する上で必須の前提となる資料の入手については、「外国旅費」を用いて、2010年9月にドイツ国立図書館（ライプツィヒ）とフリードリヒ・エーベルト財団附属図書館（ボン）を訪れ、2週間の現地調査と資料収集を行い、国内では入手不可能な多数の貴重な資料を複写することができた。また、そのさい、本研究課題と密接に関連する研究を行っているライプツィヒ大学書籍学研究所のジークフリート・ロカティス教授を訪ね、研究の進め方や問題点の解決について有意義な指導と助言を受けた。この調査において、「ドイツ民族商業補助者連合」の種々の定期刊行物と「ドイツ家庭文庫」の広報宣伝雑誌である『かまどの火』の多くを収集できたことにより、本研究の基礎は盤石なものとなった。また、「ドイツ家庭文庫」と類似の団体が「ブッククラブ」という名で同時代のドイツに数多く存在し、それらに関する多数の先行研究が見られることが明らかになったことは、本研究の意義を裏づけるものとして、研究遂行の強力な推進

力となった。さらに、後述のように、2012年には、マインツ大学書籍学研究所で資料調査を行う機会が得られ、その中で、「ドイツ家庭文庫」についても重要な資料を多数収集することができた。

資料の分析と考察にあたっては、歴史学や社会学などの研究方法を含めた分野横断的な観点にも十分配慮した。また、領域の異なる研究者からの意見も受けて、研究成果の意義を確認しつつ広い視野から研究を遂行するため、国内学会、国際学会への参加も積極的に行い、計3回の口頭発表を行った。

4. 研究成果

本研究の成果は、次の4つの点に集約される。

(1) まず、「ドイツ家庭文庫」の母体をなす「ドイツ民族商業補助者連合」の教育・出版活動については、連合内部で実施された「職業教育」、「一般教育」、「青少年教育」と、連合の下部団体である「フィヒテ協会」の活動を中心に考察した。その結果、「ドイツ民族商業補助者連合」の教育活動が1900年代初頭から一貫してドイツにおける民族主義的な信条の普及に貢献し、資本主義的大経営の発展とプロレタリア運動の高まりの中で身分の低下に対する危機感を強めていた商業職員に強い影響を及ぼし、彼らのナチズムへの接近をもたらしたことを跡づけ、それによって、ドイツにおいて因習的な中間層イデオロギーがナチズムと合流した過程の一端を解明した。と同時に、商業職員の身分を高める上で、職業的知識だけでなくより広い一般教養を身につけることと、ドイツ人の民族性に基づく信条や世界観を培うことを重視した同連合の教育活動において、民族主義的な文学作品や歴史書の読書指導を主な目的とする「ドイツ家庭文庫」の活動がとりわけ重要な地位を占めていたこと

を明らかにした。(論文⑥～⑧)

(2)次に、こうして「ドイツ民族商業補助者連合」の教育・出版活動の中核をなした読書共同体「ドイツ家庭文庫」については、同文庫の民族主義的な特色に関する集中的な考察を行ない、次のような成果を得た。

①1923年から20年間刊行された「ドイツ家庭文庫」の雑誌の変遷と記事を詳細に分析し、同文庫の雑誌が、会員の間「民族主義的な共同体意識」を形成するための読書指導を行う上で重要な媒体であったと同時に、民族主義的信条の普及のためにより多くの会員を獲得するための主要な広報宣伝手段でもあったことを明らかにした。(論文④)

②「ドイツ家庭文庫」の本の装丁に着目し、同文庫において本が市民的教養の象徴とみなされていたことを確認するとともに、とりわけ「総クロス装」の重視が、同文庫における「民族主義的信条」の重視と密接に関連し、会員への「民族主義的な価値観」の指導の一部をなしていたことを明らかにした。(論文③)

③「ドイツ家庭文庫」の図書提供システムを詳細に分析し、「自由選択」の拡大という「営利的」な手法が取り入れられる一方で、実際の購入においては「自由選択」の権利の放棄が強く要請されるとともに、会員の側でも進んでそれに従っていたことを突き止め、同文庫の図書提供システムが、経済的利点よりもむしろ、「民族主義」に基づく同文庫と会員の固い信条的結束によって成り立っていたことを明らかにした。また、1916年から1942年までに「ドイツ家庭文庫」で刊行されたシリーズ図書(約200冊)の一覧を作成し、同文庫とかかわりの深い作家・作品を詳細に跡づけた。(論文②)

(3)ところで、このように民族主義的ではありながらも、ナチスの活動と直接的ななか

わりを持たない「ドイツ民族商業補助者連合」とナチスとの相違は、皮肉なことに、まさにナチス政権の成立によって表面化する。連合にとって、ナチス政権の成立はまさに、長年に亘る自らの民族主義的活動が奏功したものであり、この意味で、ナチス政権下で優遇され、より活発な活動への道が拓かれることが期待された。ところが、こうして自律的な活動の継続・発展を望む連合と、ナチスの全体主義的な統制システムとの間には根本的な不一致があり、連合は、ナチス政権成立直後に「ドイツ労働戦線」に取り込まれた後、早くもその翌年に解体されてしまったのである。これに対し、「ドイツ家庭文庫」の方は、意外にも、母体をなす連合が解体された後にもなお活動を継続・発展させることができたが、そこには、これをナチズムの普及に利用しようとするナチスの意向が働いており、それだけに、ナチス政権成立以後、同文庫の出版活動は反ユダヤ主義的、民族主義的、ナチス的な特色をそれまで以上に強め、ナチスの宣伝媒体としての役割を強めて行った。「ドイツ家庭文庫」に関する先行研究において、従来、同文庫の活動は1934年の「ドイツ民族商業補助者連合」の解体と同時に終わりを迎えたと考えられていたのに対し、同文庫がその後もナチス政権末期まで活動を継続し、ナチスの政権維持に役立ったことを明らかにしたことは、本研究の大きな成果の一つと言える。(論文①)

これら(1)～(3)の成果と、採択前年度に公刊した2つの論文の成果を総合すると、本研究の6つの主な研究課題はすべて網羅されたことになり、そこから、「ドイツ民族商業補助者連合」と「ドイツ家庭文庫」の活動は、ナチスやナチス政権の誕生以前より、保守的な商業職員を始めとするドイツ国民への民族主義的信条の普及に多大な影響を及ぼし、

とりわけ第一次世界大戦後のドイツにおけるナショナリズムの隆昌とナチス政権の成立に大きく貢献した、またナチス政権成立後には、連合が統制・解体される一方で、「ドイツ家庭文庫」は活動を継続し、ナチスの宣伝媒体として利用された、という結論が得られた。こうして、「ドイツ家庭文庫」という一民族主義的団体とナチズムとのかかわりを、ナチスとナチス政権の成立以前・以後に亘って詳細に明らかにしたことにより、文学的な対象を通じたナチズムの研究方法の一つのモデルを提示するという本研究の目的はおおむね達成されたと言える。

(4) 以上が本研究の本来の研究成果であるが、これに加えて、本研究の当初の射程を越える成果と言えるのが、「ブッククラブ」という新しい重要な研究対象の発見であった。すなわち、本研究の過程で、「ドイツ家庭文庫」と同じように、特定の会員を対象に本を安く販売する組織が、同時代のドイツに多数存在し、それらが通常「ブッククラブ」と呼ばれていること、またそれらについて、書籍販売の重要な一形式としてドイツに多数の先行研究が見られることが明らかになったのである。そこで、本研究の一環として、ドイツにおける「ブッククラブ」の成立・発展、およびそれらに関する研究の観点を詳しく分析し、それを通して、「ドイツ家庭文庫」がその民族主義的な特性という点で、当時の「ブッククラブ」の中でも特異な存在であったことを明らかにした。(論文⑤) さらに、このような「ブッククラブ」に関する研究に対し、財団法人国際文化交流事業財団より研究費(人物交流派遣・招聘事業:日本人海外派遣)を受け、2012年11月末から12月初めにかけて、マインツ大学書籍学研究所において2週間の調査を行ない、多数の重要な資料を収集するとともに、同研究所のウーテ・シュ

ナイダー教授のもとで、「ブッククラブ」研究の効果的な進め方について指導・助言を受けることができた。

以上(1)～(4)により、本研究は、ナチズム研究およびドイツ文学研究に新たな知見をもたらしたと言える。今後は、本研究の成果を発展させ、ドイツにおける「ブッククラブ」全体を視野に納めて、その成立・発展と社会的役割を包括的に明らかにすることが、主たる研究課題となる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計8件)

- ①竹岡健一: ナチス時代の「ドイツ家庭文庫」の活動について(『かいろす』第50号、57～96頁、2012年12月)(査読: 有) URL: <http://www.ip.kyusan-u.ac.jp/J/noguti/kai1-37/kai-zf/kai50.pdf>
- ②竹岡健一: 「ドイツ家庭文庫」における図書提供システムと「信念のきずな」のかかわりについて(九州大学独文学会機関誌『九州ドイツ文学』第26号、27～55頁、2012年10月)(査読: 有)
- ③竹岡健一: 「ドイツ家庭文庫」における本の装丁の重要性について(鹿児島大学法文学部紀要『人文学科論集』第76号、53～75頁、2012年7月)(査読: 無) URL: <http://hdl.handle.net/10232/14501>
- ④竹岡健一: ドイツ家庭文庫の雑誌の変遷と収録記事——1923年1号から1941年4号まで——(鹿児島大学言語文化論集『VERBA』第36号、85～130頁、2012年3月)(査読: 無)
- ⑤竹岡健一: ドイツにおける「ブッククラブ」の歴史と研究の観点(『かいろす』第49号、33～65頁、2011年11月)(査読: 有) URL: <http://www.ip.kyusan-u.ac.jp/J>

/noguti/kail-37/kai-zf/k49takeoka.PDF

⑥ 竹岡健一：ドイツ民族商業補助者連合（DHV）の教育活動——その全体像と「民族主義的」特色—— 補説 フィヒテ協会と雑誌『ドイツ民族性』（九州大学独文学会機関誌『九州ドイツ文学』第 25 号、27～54 頁、2011 年 10 月）（査読：有）

⑦ 竹岡健一：ドイツ民族商業補助者連合（DHV）の教育活動——その全体像と「民族主義的」特色—— 第Ⅱ部 一般教育、青少年教育、および結論（鹿児島大学法文学部紀要『人文学科論集』第 74 号、133～164 頁、2011 年 7 月）（査読：無）URL：
<http://hdl.handle.net./10232/11728>

⑧ 竹岡健一：ドイツ民族商業補助者連合（DHV）の教育活動——その全体像と「民族主義的」特色—— 第Ⅰ部 序論と職業教育（鹿児島大学言語文化論集『VERBA』第 35 号、91～112 頁、2011 年 3 月）（査読：無）

〔学会発表〕（計 3 件）

① Kenichi Takeoka: Über die Wichtigkeit des Bucheinbands in der „Deutschen Hausbücherei“（アジア・ゲルマニスト会議〔国際学会〕、2012 年 8 月 20 日 於九華山庄貴賓樓大酒店〔ジウファ・パレス・ホテル 北京〕）

② 竹岡健一：ドイツにおけるブッククラブの歴史と研究の観点（日本独文学会 2011 年度秋季研究発表会、2011 年 10 月 16 日、於金沢大学）

③ 竹岡健一：ドイツ民族商業補助者連合（DHV）の教育活動——その全体像と「民族主義的」特色（日本独文学会 2010 年度秋季研究発表会、2010 年 10 月 10 日、於千葉大学）

〔その他〕

①外部資金獲得

竹岡健一：ドイツにおける「ブッククラブ」（Buchgemeinschaft）と「書籍学」（Buchwissenschaft）に関する文献の調査・収集（財団法人国際文化交流事業財団派遣・招聘事業：2012 年度、日本人海外派遣）

②ホームページ

鹿児島大学法文学部ホームページ 学科紹介・人文学科 教員・研究室紹介 竹岡研究室ホームページ：<http://ecowww.leh.kagoshima-u.ac.jp/staff/Takeoka/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

竹岡 健一（TAKEOKA KENICHI）

鹿児島大学・法文学部・教授

研究者番号：30216874

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

」